読売歌壇

小池　光　選

雨ふれば学校休む友のいた遠い昭和の傘の黒さよ　仙台市　植沢　悦子

【評】雨傘が貴重品で、家に何本もなかった時代がある。雨が降れば傘が無くて、学校に来られないクラスメートもいた。過ぎ去りし昭和の黒い黒い雨傘よ。

八月のだれもゐない生家にて座敷童子と対面をする　対馬市　神宮　斉之

【評】もはや誰も住まなくなった生家を訪ねる。古い畳の上に一人座っていると、座敷童子がふと出て来るような気がする。いや、座敷童子はわたしかも知れない。

底辺を水平線とし二等辺三角形の利尻岳立つ　札幌市　橘　晃弘

【評】北海道の海に聳える利尻岳。富士山型の山容が、水平線を加えて二等辺三角形だ。それだけのことだがこういう歌もおもしろい。

終戦を知らずも父の側に座し泣きしは国民学校一年の夏　小田原市　後藤　忠国

新妻と乗りたる丘の観覧車回れよ回れ想ひ出でたり　小美玉市　松山　光

巴里祭も飲む口実に集ひたりし友らも今は散りぢりとなる　稲城市　山口　佳紀

ある時は母のごとくにある時は姉のごとくにみえる我が娘よ　加茂市　田代　旅子

小二の児小さき胸に憂いあり「もう学校は辞めたいよ」と言う　所沢市　岡田　陽一

おじさんの麦わら帽子似合ってる近所の公園蟬が啼いてる　鳴門市　楠井　花乃

真っ青な空が目にしむ梅雨明けは地球に生きて八五歳　横須賀市　小林　一徳

栗木　京子　選

孫が聞く「次の選挙はいつあると？」十七歳は待ってるらしい　熊本市　甲賀　亨子

【評】もうすぐ十八歳になって選挙権を得る孫。初めての投票を心待ちにしている。七月の参議院選挙も関心を持って見つめていたのだろう。頼もしいその姿が輝いている。

巡行の大雨止みて蟬の声ことし二度めの夏が始まる　京都市　五十嵐幸助

【評】七月十七日に行われた祇園祭りの山鉾巡行。京都市内は大雨だった。祭りのハイライトが無事に済み、蟬が鳴き始めた。「ことし二度めの夏」がきっぱりとしている。

風蘭の花浮きあがる月明かり白き珊瑚のごとく光りて　川西市　片岡　順子

【評】香りのよい風蘭の花が月の光を受けている。珊瑚の比喩や「浮きあがる」によって水中の光景のような神秘性が伝わる歌。

みんなみな逝ってしまった「ありがとう」改めて礼言う盆が来る　東京都　神通芙美代

水瓶に切り浮かべたる紫陽花の花房三つ涼風に揺る　山形市　佐藤　紀之

ひたすらに「なんくるないさー」繰り返すロボットの欲し、介護生活　平塚市　北村みゆき

熱射受け日傘が並ぶ交差点ハンディファンも人の数だけ　秦野市　宮田　新

「この花が茴香です」と我に説く青年の眼に知性あふれる　浜松市　秋原　容子

菜譜見ず冷やし中華を注文すわれら夫婦のいつもの午後に　水戸市　大野太加し

先生はテキパキし過ぎて淋しいと老の患者ら口口に云ふ　所沢市　小室　佳久

俵　万智　選

五時十五分の長針われを乗せ約束の五時半を目指せり　東京都　富見井高志

【評】日常の一コマから生まれたファンタジー。針の先に乗って90度下まで運ばれるという大胆な空想は、その約束への期待感をも伝えてくれる。

もう全部夏のせいにして君のことなんか忘れて海へ行こうか　大和郡山市　大津　穂波

【評】海へ行くのは一人か、二人か。結句の解釈が分かれる歌だが、私は「君と二人」が面白いと思う。やけくそのように御破算にして、一からやり直そうというのだ。

なにもかもうまくいかない午後だけど麦茶の氷がひとつ笑った　高知市　矢田　敦之

【評】氷が溶けるときのカラン……という音を「笑った」と思えるなら、きっと大丈夫。読む者をも励ましてくれる一首だ。

混ぜるだけでできるゼリーを混ぜながらいまも膨らむ宇宙を思う　東京都　音羽　凜

山畑に汗ぬぐひつつ鍬を置く口紅ほどの夕焼けながめ　匝瑳市　椎名　昭雄

設定が二十八度のクーラーのようなやさしいさよならだった　上尾市　関根　裕治

男児との夏を楽しむ心得に虫取り網を二本揃える　大和郡山市　本田　岳

図書館で入門書など借りて来る百才まではまだまだあるから　川越市　和田美千子

「好きです」は時計の中でハトになりそろそろ君へ飛びだす時間　朝霞市　くりはらさとみ

幼子が手を振った雲が幾度も姿を変えて会いに来る夏　高島市　宮園佳代美

黒瀬　珂瀾　選

アイドルが元アイドルになるときの光を思いつつ夏の海　八王子市　吉村のぞみ

【評】引退するアイドル。そのラストライブの光が華やかであればあるほど、去りゆく者の悲しみもただよう。そんなふうに、この厳しい夏もいずれ秋へと移りゆくのでしょう。

数日の入院なれど幾たびも荷物の中身を母は問ひたる　鳥取県　川上　寛史

【評】入院するのは作者だと読んだ。子を案じる母が、これは要らないか、あれを忘れてないかと何度も訊く。入院する母が不安に駆られている歌という可能性もあるが、どちらにしろ親子の情をユニークな形で捉えた歌。

グールドの十指が弾をことごとくバッハの楽にかえてゆく夢　春日部市　宮代　康志

【評】芸術の力で戦争を終わらせることはできないか。そんな理想の夢が切ないです。

AIで蘇らせたチャップリンに演じてほしい『シン・独裁者』　阪南市　岡本　文子

勤続の賞状持ちて面会せる六十男を母は褒めおり　小山市　多田木まさのり

ラクレットチーズの下に隠されたじゃがいもみたいな本心がある　高島市　くらたか湖春

暑くとも生命ある身のありがたさ百四歳の母と暮らせば　町田市　小堀　正伸

一日終へけふ存へしことに謝すわが家の夕餉三酒三菜　神戸市　大浜　義弘

肩組みてインター唱ひ旗振りしかの友垣の消息聞かず　大網白里市　小林　栄一

木の床の明るき店舗に帆船の乗組員のやうに入りゆく　岐阜市　後藤　進

◇投稿規定◇　はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はせんこうはなび